

今様起源譚の展開

——中世聖徳太子伝から——

植 木 朝 子

『梁塵秘抄口伝集』（以下『口伝集』と略す）巻一断簡には、次のような今様起源譚が記されている。

用明天皇の御時、難波の宿館に、土師の連といふものありき。声妙なる歌の上手にてありける。夜、家にて歌をうたひけるに、屋の上に、付けてうたふものあり。あやしみてうたひ止めば、音もせず。またうたへば、また付けてうたふに、驚きて出でて見るに逃ぐるものあり。追ひて行きてみければ、住吉の浦に走り出でて、水に入りて失せにけり。これは熒惑星けいごくせいの、この歌を愛でて、化しておはしけるとなん、聖徳太子の伝に見えたり。

今様と申すことのおこり（以下原本なし）^①

これは本文中にその名が示されるように、『聖徳太子伝暦』（以下『伝暦』と略す）に見える次の記事が典拠になっている。

敏達天皇九年夏六月。有人奏曰。有土師連八嶋。唱歌絶世。夜

有人来相争歌。音声非常。八嶋異之。追尋至住吉浜。天晓入海者。太子侍側。奏曰。是熒惑星也。天皇大驚問之。何言。太子奏曰。天有五星。主五行。象五色。歳星色青。主東木。熒惑星赤。主南火。此星降化為人遊童子間。好作謡歌。歌未然事。蓋是星歟。天皇大喜。^②

両者を比較すると、土師連（八嶋）という歌の名手の身に起こった怪異現象に対して、聖徳太子のみせた能力を賞賛することに重点があり、熒惑星（火星）の精の出現が何か事の起こる予兆であると太子が見破ったことをこそ述べる『伝暦』に対し、『口伝集』は、今様の起こりを土師連に求め、熒惑星の精が出現したのは、歌を愛でたためだとして、この世ならざるものをつき動かす今様の力を強調しており、聖徳太子の名をあわせて出すことで今様を権威づけようとする意図が明確である。

『口伝集』が聖徳太子の時代をもって今様の起こりとするのは、歌謡史上明らかな誤りであるが、中世の聖徳太子伝においては、この説が取り上げられて、土師連（八嶋）を今様の祖とする記述が見られる。さらには、土師連（八嶋）と熒惑星の精とが歌った今様の詞章までもが記されるようになる。本論では、中世聖徳太子伝の記述から、『口伝集』巻一に見える今様起源譚の享受と展開の様相を眺めてみたい。各太子伝の記述には細かな相違が存するが、以下四つの側面から整理していくこととする。

なお、本論で参照した太子伝は次の通りであり、以下、諸本は番号で記すこととする。

① 鶴林寺本『太子伝』

（伊藤正義監修『古典研究資料集 磯馴帖 村雨篇』
和泉書院 二〇〇二年）

② 万徳寺本『聖徳太子伝』

（『中世聖徳太子伝集成 第五卷 宝物集・拾遺抄』
万徳寺本』勉誠出版 二〇〇五年）

③ 神宮文庫本『太子伝』

（『中世聖徳太子伝集成 第五卷 宝物集・拾遺抄』
万徳寺本』勉誠出版 二〇〇五年）

④ 光久寺本『正法輪蔵』

今様起源譚の展開

（『日本庶民文化史料集成 二 田楽・猿楽』三一書房

⑤ 専修寺蔵『聖法輪蔵』

（『真宗史料集成 第四卷 専修寺・諸派』思文閣出版
一九七四年）

⑥ 醍醐寺本『聖徳太子伝記』

（『中世聖徳太子伝集成 第二卷 真名本（下）』勉誠出版
一九八二年）

⑦ 輪王寺本『太子伝』

（『中世聖徳太子伝集成 第一卷 真名本（上）』勉誠出版
二〇〇五年）

⑧ 国立公文書館内閣文庫本『聖徳太子伝拾遺抄』

（『中世聖徳太子伝集成 第五卷 宝物集・拾遺抄』
万徳寺本』勉誠出版 二〇〇五年）

⑨ 四天王寺本『太子伝』

（『中世聖徳太子伝集成 第四卷 山田本』勉誠出版
二〇〇五年）

⑩ 叡山文庫本『太子伝』

（『中世聖徳太子伝集成 第四卷 山田本』勉誠出版
二〇〇五年）

①西尾市立図書館行瀬文庫本『聖徳太子伝記』

〔中世聖徳太子伝集成 第三巻 仮名本〕勉誠出版

二〇〇五年)

②国立国会図書館本『太子伝記』

〔中世聖徳太子伝集成 第三巻 仮名本〕勉誠出版

二〇〇五年)

なお、太子伝とは別に、『口伝集』巻一の影響を受けていると思われる他の今様起源譚に『郢曲相承次第』と『今様の濫觴』があり、これらの本文を併せて掲げておく。

今様濫觴事 今様者昔敏達天皇御宇。土師連八鳥歌始之。着赤衣人夜々付歌之。其声太絶妙也。乃晓天至難波浦。化不見。天皇奇之。被尋申聖徳太子之處。是熒惑星也云々。時人学而翫之。

其後廢。而山蔭中納言再興歌之。仍号今様。或号新様也。其後又天曆聖主第十姫宮(号宮姫)為東国昔墓宿長者。今様堪能也。天下今様皆彼余流也。彼時中卿濟政等皆翫之。(『郢曲相承次第』^③)

今様の濫觴。敏達天皇御宇、難波の宿館土師連八鳥歌始。音曲微妙。于時夜二人きたりて歌をあはせてきをひうたふ。常人の音声にせず。八鳥これをあやしみておひたづぬるに、赤包(袍カ・植木注)衣きたる者住吉の浜にいたる。天あくれば海に入。

上宮太子天皇奏曰、かれは熒惑星也。天皇おほきにおどろきてこれをとばば、それいかなる事ぞや。太子奏曰、天に五星あり、五方をつかさどる、そのなかに熒惑星は南方をつかさどる、その色あかし、火なり、この星人に化してよく謡歌をつくりて童子の中にまじはりて、未然のことをとなふ(委事は見上宮太子伝記歟)其後、中絶したるを、みやこに流布する事は、寛平八年に山蔭中納言歌ひろむるなる。これより今様となづく。本名謡歌也。此事は委測源書管絃目錄にみえたり。而宿に今様はじまる事、相模国こいその翁のながれもちて秘蔵ことにするなり。

足柄十首万寿三年に宮姫小三に伝之。(『今様の濫觴』^④)

【土師連八嶋と今様の関わり】

土師連八嶋が謡歌の名手であったことは『伝暦』に「唱歌絶世」と記されている通りであり、中世聖徳太子伝においてはさらに踏み込んだ記述がなされている。ただし、⑨⑩は、八嶋を「歌人」とするので、謡歌の歌い手とする伝承とはやや距離がある。⑨⑩を除くと、①は「常二好ム詠と歌ヲ」、⑧は「好テ詠詁ヲ」として、歌の種類に関する言及はないが、その他の諸本はすべて、土師連八嶋を、我朝ではじめて今様を歌い出した人物と規定しており、見るもの聞くものを今様に作って歌ったとしている。なお、「今様」の表記に

関しては、ほとんどの諸本が「今様」とし、仮名本(⑪⑫)は「いまやう」とするが、⑥のみ「今様」の他に「時勢」の表記も用いている。

『伝暦』では単に「歌」とされていたものが、今様に限定されていくのは、後白河院が『口伝集』において示した把握が踏襲されたためと思われる。

なお、「蜀曲相承次第」と「今様の濫觴」も、今様は、土師連からはじまるとするものの、一度廃れ、中絶して、山蔭中納言による再興以後、「今様」あるいは「新様」と名づけられたとする。藤原山蔭は『尊卑分脈』によれば、仁和四年(八八八)二月四日に六十五歳で没しており、『紫式部日記』寛弘五年(一〇〇八)五月に「今様歌」として初出の、今様の流行とはいまだ速く隔たっている。⑤
『口伝集』にも同様の記述があつた可能性もあるが、いずれにせよ、史実とは矛盾する記述である。さらに「今様の濫觴」は「寛平八年に山蔭中納言歌ひろむるなる」とするが、寛平八年(八九六)は、山蔭の死後八年目にあたり、その記述の中にすでに矛盾が含まれている。おそらくこれは、本書が、具体的な年号を示すことによつて、史実らしさを演出したものの齟齬をきたしたためではないだろうか。また、「今様の濫觴」は、今様の「本名」を「謡歌」としているが、これは「伝暦」の「此星降化為人遊童子間。好作謡歌。歌未然事」

の「謡歌」を引いたものと思われる。『伝暦』の「謡歌」は歌謡の種類でないことは明らかであるが、『今様の濫觴』は、『伝暦』を参照した上で、「今様」という再興後の名と併せ、整合性をもつた説明をしようとしたことが窺われよう。

【熒惑星の精の描写】

『伝暦』においても、『口伝集』においても、熒惑星の精はその声だけが問題にされており、実際の姿についての言及はない。聖徳太子絵伝において、熒惑星の姿は、恐ろしい鬼形と優美な天人形の二様にあらわされており、鬼形が天人形よりやや多いとされるが、本稿で確認した太子伝では、ほとんどが恐ろしい鬼の姿として描かれている。

①は火の如く色が赤いということだけが記され、②は大鬼神のようであるということのみを記す。その他の諸本は熒惑星を身体が赤く、二つの目は明星のように光を放つ恐ろしい鬼として描く。そのうち④⑧は、時には、手に黒雲をつかみ、脚は大海を踏むような、大山のごとき巨大な姿を現し、また時には蟬のように小さな姿を現すとして、身体の大きさの変化を具体的に描写している。⑨⑩はその他、髪に言及して夜叉の如くであるといい、身体の色は朱砂を塗つたようで、八嶋と眼を見合わせた時に笑みを含む様子はこの上なく恐ろしいと、最も具体的な表現がなされている。また、⑥⑦⑪

⑫は、「本性」の恐ろしい声を妙なる声に変化させた上で素晴らしく歌ったとして、声を変化させる「神通力」についても記している。熒惑星の精を赤い色の身体として描くのは、『伝暦』における太子の発言にもあるように、陰陽五行説の説明と対応している。なお、『口伝集』巻一の影響を受けていると思われる他書の今様起源譚でも、『口伝集』が記さない熒惑星の精の色についてふれており、『郢曲相承次第』では「着赤衣人」、「今様の濫觴」では「赤袍衣きたる者」とされる。これらの今様起源譚が熒惑星の精を赤い衣を着た人間としているのに対し、太子伝の諸本では、肌の赤い鬼と表現していて、人間離れた恐ろしさが強調されている。

歌の力を強調したい『口伝集』においては、熒惑星の精というこの世ならざるものが歌に感応したことを記せば十分であった。しかし、太子伝においては、『伝暦』で披瀝されていた聖徳太子の陰陽道の知識をよりくわしく説明し、八嶋が遭遇した事件と、聖徳太子による謎解きが見事に対応するように構成して、太子の非凡な能力を強調したと言えよう。

さらには、『郢曲相承次第』や『今様の濫觴』のように、赤い衣を着た「人」ではなく、「鬼」とすることによって、戦乱を司るという熒惑星の精のイメージを鮮烈にし、また八嶋の恐怖感を増すことで、太子の謎解きが与えた安心感を強調しているものと思われる。

【土師連八嶋の住居】

『伝暦』においては、八嶋の住居は記されておらず、後を追われた熒惑星の精が住吉の浜に至って海に飛び込んだという記述から、住吉の浜の近くだということが窺われる程度である。『口伝集』では「難波の宿館」としており、『今様の濫觴』も同様である。『郢曲相承次第』では、八嶋の住居の記述はなく、熒惑星の精が「難波浦」まで逃げたことのみが記されている。

太子伝における、八嶋の住所は、表記の違いを問題にせずまとめて示すと、以下の通りである。

「住吉ノ西浜辺ニ閑居シテ」(①)

「住吉西浜洲崎閑居」(②③)

「難波浦洲崎造家」(④⑥⑦⑪⑫)

「難波浦海ノ洲崎造家」(⑤)

「閑居……住吉西浜」(⑧)

「難波方和歌之浦」(⑨⑩)

このように、太子伝の記述からは、八嶋は海辺の洲崎(洲が突き出しているところ)に質素な家を作って住んでいるという印象が与えられる。

一方、『口伝集』のいう「難波の宿館」は、もう少し立派な、あるいは公的な建物を思わせる。「宿館」は、文字通りには宿泊する

やかた、宿舎ということ、個人的なわび住まいとは異なる趣を持つ。たとえば、『皇太神宮儀式帳』には「大内人」や「物忌并小内人」の「宿館」^⑦が見え、『吾妻鏡』には治承四年（一一八〇）十月六日頼朝の相模到着に際し、「楚忽之間。未及宮作沙汰。以民屋被定御宿館」^⑧とある。民家をもって旅の宿とした旨を記すものであるが、頼朝の宿所として、「宿館」には一定の公式な響きが感じられるよう。このような、公的な宿館として、難波と結びつくのは、難波鴻臚館である。難波鴻臚館は外国の使節を接待するために置かれた役所で、来朝した三韓の使人を宿泊させた^⑨。土師氏は渡来系の氏族であり、外交を職掌の一つとしたため、鴻臚館に出入りすることも不自然ではない。

しかし、なぜ「口伝集」は、「伝暦」にはない土師連の住居を「難波宿館」とし、そして後世の太子伝はそれを踏襲せずに海辺の質素な閑居を設定したのだろうか。

これまでも述べてきたように、「伝暦」および太子伝は、聖徳太子の素晴らしさを強調することに主眼があつて、土師連八嶋その人について、さほど詳しい情報を伝える必要がそもそもなかった、とも言える。しかし「口伝集」においては、土師連は今様の祖と規定される重要な人物である。以前、論じたことがあるが、土師氏は喪葬儀礼に深く携わり、葬歌の起源にも関与していたことが指摘さ

れている。さらに楯伏舞を奉仕していたことも知られ、芸能・歌謡との関わりの深い氏族であつた^⑩。そうした氏族から、歌の名手が出ることは故無しとしないが、さらに土師連その人が、ある公的な場所に宿泊していた―先の推測が正しいとすれば、外交の職掌をもって鴻臚館に出入りしていた―とすることによって、土師連の置かれた立場を重いものとし、今様の祖としての權威を持たせようとしたのではないだろうか。

【土師連八嶋と熒惑星の精の歌のやりとり】

『伝暦』においても、『口伝集』においても、また、『郢曲相承次第』や『今様の濫觴』においても、土師連八嶋と熒惑星の精とが歌つた歌の詞章は記されないが、太子伝においては、両者のやりとりした歌が具体的に記される。以下に諸本に載せる歌を掲げた。諸本の番号の後に「」で掲げたのは、各本がその歌をどのよう

①「詠云」

I Aわが宿の甕に語る声はたそ確かに名告れ四方の草ども
B 天の原南に住める夏火星ぞいづれの草ぞ豊聡に問へ

II A 昼鳴かぬ蟬の夜鳴きは何ならん鳴く由あらば木末にも鳴け

B 昼鳴くは木末隠れの蟬なれやいとたえやらす夜々ぞ鳴く

(別伝…由あるやなしや鳴くこの蟬の声鶯の御山の君ぞ知るらん)

②「今様作詠」

I A わが宿の薨に語る(或説に「つくる」、或説に「名乗る」)声は

たそ確かに名告れ四方の草ども(① I A に同じ)

B 天の原南に住める(一説に「廻る」)夏火星ぞいづれの草ぞ豊

聡に問へ(① I B に同じ)

③「今様作詠」

I A わが宿の薨に語る(或説に「作る」、或説に「名乗る」)声はた

そ確かに名告れ四方の草ども(① I A に同じ)

B 天の原南に住める(一説に「廻る」)夏火星ぞいづれの草ぞ豊

聡に問へ(① I B に同じ)

④「歌詠云」

I A わが宿の薨に語る声はたそ確かに名告れ四方の草ども(① I A

に同じ)

B 天の原南に住めるあか星ぞ豊聡に問へ四方の草ども

II A 昼鳴かぬ蟬の夜鳴く何やらん鳴く由あらば木末にも鳴け

B 由ありやなきや鳴く音の蟬の声鶯の御山の君ぞ知るらん

III A 昼鳴くは木末隠れの蟬なれやいとたえやらす夜な夜なぞ鳴く

B 昼鳴くは木末隠れの蟬の声夜々鳴くは万世のこと

⑤なし

⑥「時勢二詠テ」

I A わが宿の薨に語る声はたそ確かに名告れ四方の草ども(① I A

に同じ)

B 天の原南に住める夏火星ぞ豊聡に問へ四方の草ども

⑦「今様詠」

I A わが宿の薨に語る声はたそ確かに名告れ四方の草ども(① I A

に同じ)

B 天の原南に住める夏火星ぞ豊聡に問へ四方の草どもかな

⑧「詠云」「歌云」

I A わが宿の薨に語る声はたそ確かに名告れ四方の草ども(① I A

に同じ)

B 天の原南に住める夏火星ぞいづれの草ぞと豊きみに問へ

II A 昼鳴く蟬の夜鳴きする何事を鳴くやらむ鳴け鳴け鳴け来ん末も

鳴け

(別伝…昼鳴かぬ蟬の夜鳴きは何やらむ鳴く由あらば来ん末も鳴

け)

B 由ありやなきや鳴く音の蟬の声鶯の御山の君ぞ知るべし

(別伝…昼鳴くは木末隠れの蟬なれやいとたえやらす夜々ぞ鳴く)

(別伝…昼鳴くは木末隠れの蟬の声夜々鳴くは万世のこと)(④ III

Bに同じ)

⑨ 「歌以テ問テ云ク」

I Aわが宿の覺に告ぐる声はたそ確かに名告れ四方の草ども

B 天の原南に住める夏火星ぞいづれの草とも豊聡に問へ

II A昼鳴く蟬の夜鳴きする何事を鳴く鳴くや来ん末も鳴け

⑩ 「歌ヲ詠スレハ」

I Aわが宿の覺に告ぐる声はたそ確かに名告れ四方の草ども (⑨ I

Aに同じ)

B 天の原南に住める夏火星ぞいづれの草ぞと豊聡に問へ

II A昼鳴く蟬の夜鳴きする何事を鳴くやらむ鳴け鳴け鳴け来ん末も

鳴け (⑧ II Aに同じ)

⑪ 「今様にうたひ……その曲に曰く」

I Aわが宿の覺につくる声はたそ確かに名告れ四方の草ども

B 天の原南にめぐる夏見星豊聡に問へ四方の草ども

⑫ 「一曲をぞうたひけるその歌に曰く」

I Aわが宿の覺につくる声はたそ確かに名告れ四方の草ども (⑪ I

Aに同じ)

B 天の原南にめぐる夏見星豊聡に問へ四方の草ども (⑪ I Bに同

じ)

土師連八嶋と熒惑星の精とのやりとりはほぼ短歌体からなる。こ

の歌について、①④⑧⑨⑩⑫は単に「詠する」、「歌ふ」と表現するが、②③⑥⑦⑪は「今様(時勢)」と規定している。

具体的な歌の記述を持たない⑤を除くすべての諸本に含まれるやりとり (I A B) は、八嶋が屋根の上で歌う者に対してその素性を聞いた (A) のに対し、熒惑星の精は自らの正体を明かした上で、さらに「豊聡」に尋ねるように (B) と言う。豊聡は聖徳太子の異称の一つから来ているものであり、『日本書紀』用明天皇元年正月条に「豊耳聡聖徳」「豊聡耳法大王」と見え、推古天皇元年四月条に「上宮既戸豊聡耳太子」と見える。^⑩「豊」は美称であり、「聡耳」は聡明さを讃える称号であると思われるが、名前の連想から太子は一度に十人の訴えを聞き分けて理解したという説話も生まれた〔『日本書紀』推古天皇元年四月条〕。ここで問題にしている逸話においては、聡明な太子こそが熒惑星の精の正体を知っているということと熒惑星の精自身がはめかしているのであるが、逸話の背後には八嶋と熒惑星の精とが美声を競って歌を歌っている状況と、太子の「耳のよさ」という連想が、遠く響き合っているように思われる。

II IIIのやりとりは、屋根の上で歌う者を夜鳴く蟬にたとえたもので、なぜ鳴くのかという問いに対して、あまり明確な答えは示されない。ただし、①④⑧に見える「鶯の御山の若」は、④⑧の太子伝

の本文が解説するように、聖徳太子を指すと考えられ、この場合、「豊聡」に尋ねるようというI・Bと趣旨が重なっている。「鶯の御山」すなわちインドの霊鷲山は、釈迦説法の地であり、ここでは聖徳太子が釈迦に重ね合わされ、ますますその権威を増していると言えよう。なお、⑨⑩においては、II A「昼鳴く蟬の夜鳴きする何事を鳴く（やらむ）……」について、太子が三十五歳の時、勝鬘経を三日三夜説いたことと対応させて「鳴く」を三回繰り返したとし、四十六歳で重ねて勝鬘経を説いたことが「来ん末も鳴け」に対応すると説明されている。ここでは、聖徳太子が、鬼神の正体を熒惑星の精と見抜いたことよりも、熒惑星の精の予言の広がりの方に、重点が移っている。

以上、見てきたように、「口伝集」は、熒惑星の精の姿をくわしく書くことはせず、土師連については、難波の宿館にいて、ある権威付けを行っていることが確認できる。今様の起源に関わる土師連に重点を置き、熒惑星の精には、主として美声に感応する超越的存在という役割が与えられていたのであった。一方、太子伝においては、土師連八嶋は事件に遭遇した人物であるに過ぎず、むしろ熒惑星の精の方に描写の重点が置かれていた。後の聖徳太子の説明と符合する要素（赤い色）を強調し、聖徳太子こそが自分の正体を見破るであろうことを歌の中で知らせてもいる。さらには、将来

の太子の事跡を予言することによって、太子の偉大さを前面に押し出しているのである。

歌謡の力を強調するか、太子の才能を強調するかによって、逸話に登場する人物の描き方が異なるのは当然予想されることであるが、「口伝集」の伝承を取り込んで、土師連八嶋を今様の祖とする太子伝諸本も、最終的には、太子の偉大さに叙述を集約していることが改めて確認できよう。

注

- ① 新編 日本古典文学全集「神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集」(小学館 二〇〇〇年)による。
- ② 「統群書類従 第八輯上」(統群書類従完成会 一九八三年〈訂正三版〉)による。
- ③ 「統群書類従 第十九輯上」(統群書類従完成会 一九八四年〈訂正三版〉)による。
- ④ 馬場光子「今様の心とことば」(三弥井書店 一九八七年)所収の写真版により、私に句読点、濁点を付した。
- ⑤ 山藤については、菅野扶美「山藤中納言ノート」(「梁塵 研究と資料」第一号 一九八三年二月)にくわしい。
- ⑥ 奈良国立博物館編「聖徳太子絵伝」(東京美術 一九六九年)。解説は菊竹淳一・上田英次。
- ⑦ 「群書類従 第一輯」(統群書類従完成会 一九五九年〈訂正二版〉)による。
- ⑧ 「新訂増補国史大系 吾妻鏡前篇」(吉川弘文館 二〇〇四年)〈新装

版)による。

⑨ 瀧川政次郎「むろづみ考」(『国学院雑誌』第五八卷第二号 一九五七年六月)、同「難波館址考」(『大和文華』第三号 一九五七年六月)。

⑩ 植木朝子「今様起源譚考」(『文学』季刊第八卷第四号 一九九七年

〇月)、「土師氏と芸能—今様起源譚から能「道明寺」へ—」(『日本歌謡研究』第三七号 一九九七年二月)。

⑪ 新編日本古典文学全集『日本書紀』②(小学館 一九九六年)による。

(付記) 本研究は、科研費(課題番号・20520188)の助成を受けたものである。